

インフラノズ超高音質盤の試聴 (2)

—種々の処理—

4. CDR のリマスター

下記のプロセスで超高音質盤 CDR と同一スペックの太陽誘電のブランク CDR 盤に焼いて、元の盤と比較してみます。Track の奇数番号がキング盤、偶数番号が超高音質盤由来としています。これらを元のキング盤、超高音質盤と比較しながら聴いています。

①リッピング後、CDR 焼き付け (Track1~2)

②DA-3000 で DSF, 5.6MHz 録音後、44.1KHz,16bitWAV にダウンコンバートし、CDR 焼き付け (Track3~4)

③DA-3000 の DSF, 5.6MHz 変換後、SDIF 伝送で MYTEK DIGITAL 192-DSD に送り、そのアナログ出力から KORG MR2000sBK で DSF, 5.6MHz 録音後、44.1KHz,16bitWAV にダウンコンバートし、CDR 焼き付け (Track5~6)

作成した CDR は EMT981 で再生し、DA-3000 で DSF, 5.6MHz に変換後、SDIF 伝送で MYTEK DIGITAL 192-DSD に送って再生しました。

まず、リッピング後再焼き付けしたものでは、キング盤ではオリジナルとリッピングしたものはほとんど違いませんが、超高音質盤ではリッピングしてもキング盤との違いはあるものの、オリジナルからの音質低下がはっきりと分かります。その違いは音の焦点がぼやけ、声や楽器の質感が曖昧になることです。

次に DA-3000 で DSD リマスタリングした場合は、キング盤ではオリジナルに比べて DSD リマスタリングの効果が出て音の焦点が合い、声の伸びやピアノの切れが明瞭になります。超高音質盤では、DSD リマスタリングの方は、それほど大きな劣化というほどではありませんが、音楽の微妙なニュアンスが後退して単調になってきます。

DA-3000 と MYTEK DIGITAL 192-DSD 経由で MR2000sBK で DSD リマスタリングした場合、キング盤ではオリジナルに比べて DA-3000 で DSD リマスタリングした場合と同様の変化がありますが、DA-3000 に比べて膨らみのあるウオームなトーンが乗ってきます。超高音質盤では、オリジナルに比べて DA-3000 で DSD リマスタリングした場合と同様の変化がありますが、やはり音楽の微妙なニュアンスが後退し、キング盤と同様にホールの間接音成分が増えたように膨らみのある音になってきます。

5. まとめ

前報(1)の結果も含めて、特筆すべきは、超高音質盤では普及クラス CD プレイヤーで再生しても一定程度の音のクオリティを維持できる点にあります。

通例、CD のリッピングを行って焼き直しを行った場合、わずかに良くなることもあれば、悪くなることもあります。今回の超高音質盤では音質が低下してしまいます。また、PC オーディオでリッピングして HDD や USB メモリーから再生すると音が良くなることが多いのですが、今回 DA-3000 の SD メモリーに DSD 録音すると確実に音質が低下してしまいました。

また、DSD リマスタリングについては、これまで市販 CD について音質向上効果を認めてきており、キング盤では、同様にその効果を認めましたが、今回の超高音質盤に限っては微妙なニュアンスが後退するとともに、リマスタリングに使用した機器の音が乗ってきたように感じられました。

これらのことから、CD の音質については、CD に焼く前のソースのクオリティの確保が重要であることには間違いありませんが、それにプラスして焼く際の劣化を極小にすることが重要であることが分かりました。

今回の超高音質盤は元がマスターであり、そのマスターの音質を可能な限り維持して CDR を作成されたということになります。従って、現在の技術水準で得られるハイレゾ PCM マスターないしは DSD 録音マスターから、このような手法による CDR の制作が期待されます。

これまでに SACD、DVD オーディオ、数々の高音質盤と称する CD、ブルーレイディスクなどを購入しては期待を裏切られてきましたが、今回のものはそういったことはありません。通常の 44.1KHz PCM 録音のマスター音源由来の CD でここまでやれるということは、現在の CD 作成プロセスを根本的に見直さなければならないということだと思えます。

以上